

潜在的因果性バイアスに及ぼす語順と格役割の効果

○井関龍太^{1,2}・楠見 孝²
¹日本学術振興会・²京都大学教育学研究科

riseki@brain.riken.jp

背景

○潜在的因果性 (implicit causality)

“博が**史郎**を責めたのは、**彼**が_____だからだ”
 “博が史郎に謝ったのは、**彼**が_____だからだ”

動詞の種類によって続きの文で動作主として参照されやすい人物が変わる
 →動詞の意味に含まれる**因果関係に関する潜在的な知識**が文理解・産出に影響している

○潜在的因果性と談話焦点

・潜在的因果性バイアスの原因：動詞が述べる行動や状態変化の原因と見なされやすい対象に**注意が焦点化**することによる？

→文中の**焦点状態**を操作しておけば、潜在的因果性バイアスを促進・阻害できるはず

・**能動文**と受動文によるバイアスの比較 (Iseki & Kusumi, 2010, March) : NP1バイアス (第一名詞句への選好) を持つ行為動詞にのみ態の操作の効果

→意味役割に基づく解釈に一致 (Au, 1986; Brown & Fish, 1983; Rudolph & Försterling, 1997)

→しかし、受動文への変形の際に**語順** (第一名詞句か第二名詞句か) と**主題役割** (意味的主語か意味的目的語か) の両方が同時に操作されていた

○本研究の目的：語順と主題役割を独立に操作して、これらの要因が潜在的因果性バイアスに及ぼす影響を分離する

・日本語の特性を生かして、態を変えずに語順のみ変化させる / 語順を変えずに態のみ変化させる

方法

実験参加者：リサーチ会社に登録していた成人60名 (平均年齢41.2歳, 男女半数ずつ)

要因計画：2 (動詞のタイプ：行為・状態) × 2 (バイアス方向：NP1・NP2) × 3 (文形式：能動SO・能動OS・受動OS) の被験者内計画

材料：4種類のカテゴリーの動詞を6語ずつ用意した

・**AP (Agent-Patient)** 動詞：動作主が受益者に働きかける (“だます”など)

・**AE (Agent-Evocator)** 動詞：喚起者が動作主の行為を促す (“ほめる”など)

・**SE (Stimulus-Experiencer)** 動詞：主語位置の刺激が経験者の心的状態に変化をもたらす (“怒らせる”など)

・**ES (Experiencer-Stimulus)** 動詞：目的語位置の刺激が経験者の心的状態に変化をもたらす (“いらだつ”など)

各動詞を以下のような3種類の形式に当てはめて文刺激を作成した (以下は、AP動詞の例)

・**能動SO**：“**志保**が**順子**をだましたのは、彼女が_____だからだ”

・**能動OS**：“**順子**を**志保**がだましたのは、彼女が_____だからだ”

・**受動OS**：“**志保**に**順子**がだまされたのは、彼女が_____だからだ”

手続き：下線部に当てはまる内容を考えて文を入力し、代名詞 (彼/彼女) の指す対象が完成した文のどちらの人物に当たるか回答

得点化：例文の“**志保**”に当たる人物 (能動SOのNP1) = 1, “**順子**”に当たる人物 (能動SOのNP2) = 2

結果と考察

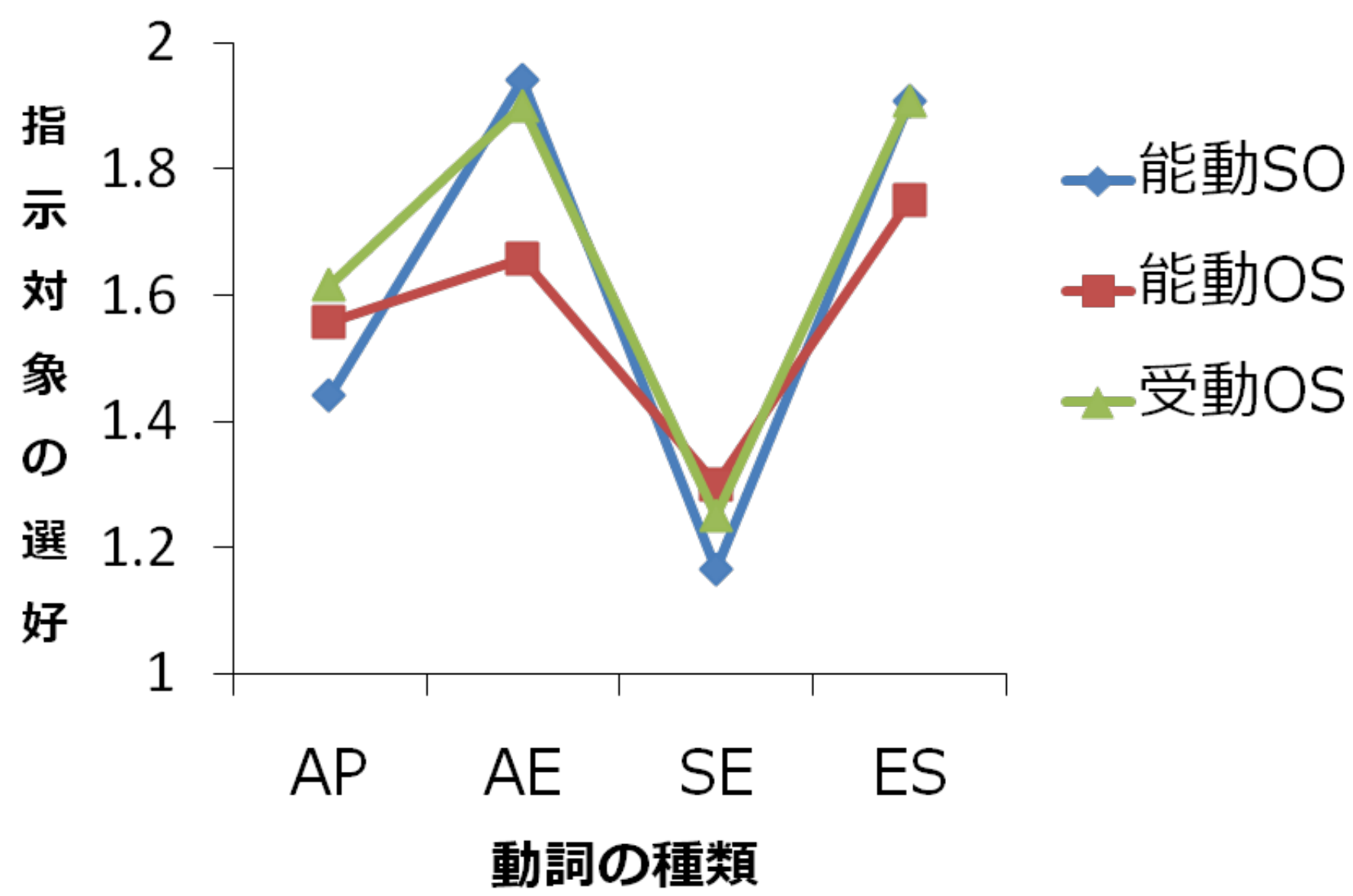


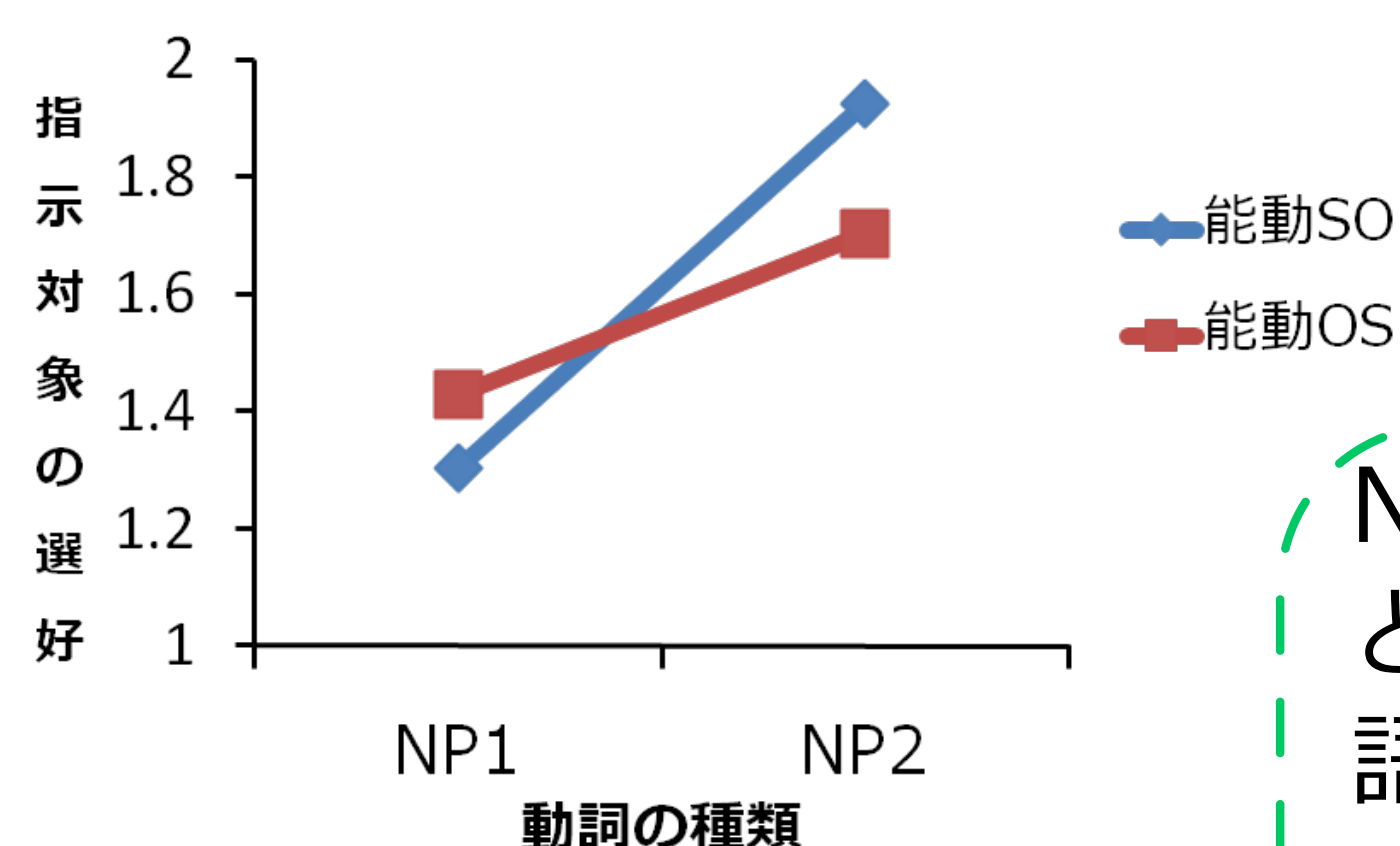
Figure 1. 各条件における指示対象の選好パターン

【語順の効果：能動SO vs. 能動OS】

・能動文どうしの比較では、先に言及された人物の方が続きの文で動作主として参照されやすい (バイアス方向 × 文形式)

a) NP1動詞：SO文よりもOS文で第二名詞句の人物が選ばれやすい

b) NP2動詞：SO文よりもOS文で第一名詞句の人物が選ばれやすい (NP1動詞よりも大きな効果)



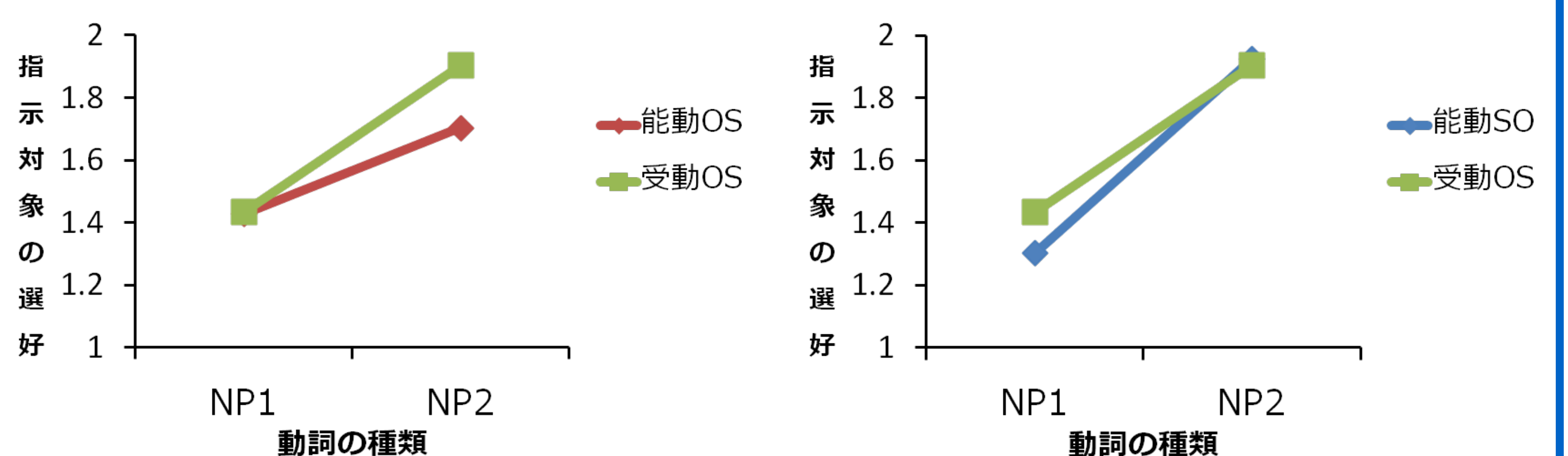
NP1バイアス動詞への焦点効果と思われたものは、実際には、語順の全般的な効果と主題役割のNP2特定の効果が加算的に働いた結果かもしれない

【主題役割の効果：能動OS vs. 受動OS】

・NP2動詞でのみ、動作主と受益者の役割を入れ替えたことの効果 (バイアス方向 × 文形式)

a) NP1動詞：役割を操作することの効果なし

b) NP2動詞：第二名詞句が動作主であるときの方が続きの文で参照されやすい



【組み合わせの効果：能動SO vs. 受動OS】

・NP1動詞でのみ、動作主と受益者の役割を入れ替えたことの効果 (バイアス方向 × 文形式)

a) NP1動詞：受動OS文では、能動SO文よりも第二名詞句の人物を参照する文が作られやすい

b) NP2動詞：文形式の操作の影響なし

結論

・**語順**と**主題役割**は、**潜在的因果性バイアス**に対してそれぞれ異なる効果を持つ

a) **語順**：バイアスを調整する

(バイアスに反して、先に言及された人物への焦点化を助ける)

b) **主題役割**：第二名詞句にのみ限定的な効果 (第二名詞句選好のバイアスを強化する)